

『平家物語』重衡説話成立の一背景

——大納言典侍と近衛家——

塩山 貴奈

「キーワード ①『平家物語』 ②平重衡 ③大納言典侍 ④近衛家 ⑤一乗院」

一. はじめに

南都炎上を引き起こした罪人として平重衡は処刑された。処刑直前に北の方大納言典侍と再会を許される悲話や、処刑の後には南都の大衆らによつて首を晒され、大納言典侍や勸進聖俊乗房重源によつて供養されるといった重衡の最期をめぐる話はいずれにも有名である。『平家物語』『重衡被斬』をはじめとして、重衡の死はさまざまな形で伝えられている。しかし、じつは重衡処刑当時の記録はさほど残っていない。たとえば九条兼実は、重衡は木津で斬首され、その首は奈良坂に晒されたという情報のみ日記に書き留めている。^{注1}

さきにわたしは、「重衡被斬」における重要人物大納言典侍のその後に着目し、彼女の動向や人間関係等をたどつてゆくことで「重衡被斬」成立の背景を考察した。^{注2}近衛家周辺と大夫三位、大納言典侍姉妹の関係を探ることを主としたが、今回もま

た、大納言典侍を中心とする重衡関係者の人間関係、平氏敗北後の社会状況などをより詳細に、多方面に浮かび上がらせてゆきたい。

二. 重衡に残されたひとびと

南都への道中、重衡は北の方大納言典侍に一目会いたいと守護の武士らに懇願する。その時、重衡が述べたことばは次のようなものだった。

此程事にふれてなさけふかう芳心おはしつることありがたううれしけれ。同くは最後に芳恩かぶりたき事あり。我は一人の子なれば、この世におもひをく事なきに、年来あひぐしたりし女房の、日野といふところにありとさく。いま一度対面して、後生の事を申をかばやとおもふなり。

（覚一本『平家物語』『重衡被斬』）
子のない重衡という人物造形は、妻子への情を断ち切ること

がでさずに苦しむ維盛や、子息清宗の存在を気にかけながら首を斬られた宗盛などとは対比的である。たしかに重衡嫡男の存在は見受けられない。重衡に嫡男がいれば、頼朝方の者の手によつて殺されることは避けられなかったであろうし、その心配がないことはひとつの救いだったのだろう。

しかし、重衡にも都に残してきた存在がないわけではない。^{注3}はつきりと記録がある限りでも、『山槐記』治承四年（一一八〇）三月九日条に、「衡子、號少将局、藏人 頭重衡朝臣養女」という重衡の養女の存在が確認できる。この衡子という女性について、『親経卿記』

治承四年五月八日条には「掌侍申爵、正六位上平衡子、件人不可被、然面只令攝入、子細見典侍所」とあつて当時正六位上であつたことが知れる。また、『吉記』養和元年（一一八一）十一月十二日条等に「少将内侍」という人物がみえ、これも衡子を指すかと思われる。^{注4}

平氏一門の西国落ち、そして壇ノ浦での敗戦以後、衡子がどのような境遇にあつたのか定かでない。しかし、彼女が平氏政権の栄華もその衰退をも目の当たりにした女性であつたことは確かだろう。戦いのなかで平氏の公達や彼らに仕えた家人らは次々と命を落とし、また、多くの者が処刑されていった。処刑の対象から外れている女性たちは、凄惨な現実を受け入れ見届けなければならなかつた。そうした重衡をよく知る者たちの昔語りによつて、亡き重衡が偲ばれ、語られていたであろうことは想像に難くない。『建礼門院右京大夫集』が伝える重衡の姿などはまさにその例であらう。

そして、重衡を弔う女性として大きな存在であるのは、北の

方大納言典侍である。壇ノ浦で生け捕られ、京へ戻ってきた大納言典侍はどこへ向かつたのか。『平家物語』では、日野にある大夫三位邸（『簡要類聚鈔』によれば「日野殿」）に身を置いたとし、重衡がその大夫三位邸を訪れたとする。しかし、それは史実をそのまま伝えているわけではない。^{注5}『醍醐雜事記』によれば、大納言典侍は重衡との再会を果たすため、醍醐寺僧行延の僧房を借りて待つていたという。重衡と大納言典侍の再会の舞台は、日野殿ではなかつたのである。

延慶本『平家物語』では、大納言典侍は「人々ノ館ハ皆焼レニシカバ、西国ヨリ帰給□ニモ、立入給ベキ所」がないため日野殿に身を寄せたとされている。しかし、大納言典侍は都に邸宅を所有していたことが『簡要類聚鈔』から知られるし、また、都には邦網縁者が少なからずおり（後述）、この延慶本の記述などは大納言典侍の身の上をより悲劇的に描くための工夫のひとつと考えられよう。

三. 邦網子息らのその後

大納言典侍は藤原邦綱の娘である。重衡の北の方であつた大納言典侍は、平氏一門とともに都を離れ西国まで落ちてゆくが、大納言典侍が西国から都へ戻ってきたとき、他の邦網子息や邦網縁者はどのような立場であつたのだろうか。大納言典侍が京へ戻った後、また、夫重衡が処刑された後、大納言典侍がいかなる環境に身を置くことになったのかを考えるうえで、邦網関係者の当時の状況は押さえておく必要がある。前稿では、邦

綱息重邦、邦綱女綱子に多少ふれた程度であつた。ここでは改めて邦綱関係者を整理し、その足跡を追ってみる。

『尊卑分脈』には邦綱の子として、泰季（猶子。高階仲親息）、重邦（母増仁女）、清邦（母公能女）、基能（持明院基家の養子となる）、長綱、忠綱、基行、円綱（母理髮鶴子）、六条院乳母成子（母公俊女）、高倉院乳母邦子（母、成子に同じ）、安徳天皇乳母輔子（母、成子に同じ）、建礼門院乳母綱子が記載されている。ただ、『公卿補任』^{注6}により、基行はたびたび名を改めており、邦門、基能を経て基行として知られるので、『尊卑分脈』の基能、基行は重複と考えられる。また、基行の母が公能女であることは『公卿補任』や『尊卑分脈』から分かり、基行と清邦は同母兄弟ということが明らかになる。

詳細の不明な邦綱子息の存在もある。たとえば、『尊卑分脈』では藤原宗隆息実隆の母が邦綱女となっているし、『玉葉』文治三年四月十七日条では、冷泉局所生の邦綱女が藤原親能に娶られたことが記されている。冷泉局とは、白河殿（盛子）女房で後白河院にも非常に近く仕えた公能女のことであり、すなわち親能室邦綱女は清邦、基行と同母兄妹ということになる。

このように邦綱には多くの子息があり、清邦のように平清盛の猶子となったり、成子らのように天皇や女院の乳母となるなどとして、邦綱の立場を堅固にする役割を果たしていた。父邦綱の築きあげた人間関係は、当然ながら邦綱子息らに大きな影響を与えている。平氏一門の西国落ち、そして壇ノ浦での敗北は、邦綱の子息らにとっても大きな衝撃となつたであろうが、彼ら

まで都から消えてしまったわけではない。

重邦の母は増仁女である。『尊卑分脈』には、この増仁女は「高倉院女房少納言／大納言邦綱妾重邦母」とある。増仁の父隆尊の女には藤原忠通の乳母讃岐官旨がいる。『簡要類聚鈔』によれば、邦綱が忠通に仕えた功によって、邦綱が知行していた近衛家領を邦綱子息へ相伝することが認められていた。邦綱と忠通の主従関係があつたうえで、邦綱と近衛家の関係に、そして邦綱女たちと近衛家の関係へ繋がってゆくことを考えれば、高倉院女房増仁女は、邦綱の政治的な人間関係をよく反映した女性といえるだろう。その息である重邦は、父邦綱以来の近衛家との繋がりを頼りにしていたと思われる。建久年間後半から近衛家実の前駆として名が挙げられており、建久九年（一一九八）には隨身所別当に、さらに正治元年（一一九九）には近衛家の家司として名がみえている。^{注8}

公能女冷泉局を母とする基行は、邦綱子息のなかで比較的目的立つ人物といえる。曾我良成氏が、九条兼実にとつて後白河院のものと冷泉局は重要な情報源の一人であつたことを指摘しているが、冷泉局は多方面との接触がうかがえる。その息である基行にかんしては、注目すべき記事がある。

今度前右衛門佐基行初参、^{注9}卿三位^{注10}并右金吾^{注11}也。

『明月記』建仁二年（一一二二）七月十七日

基行は、卿三位と右金吾、すなわち藤原範兼女兼子と坊門信清の躰にあたるという。『尊卑分脈』では、信清女の別当局が基行室とされている。すでに実父邦綱をうしなっている基行に

とって、彼らの存在は非常に重要なものだったろう。同年閏十月には東宮亮となったが、その二年後、基行が出家をしたという噂が立つ。

人云、東宮亮基行出家、母儀制止愛物、恐權門妻之、問所為云々、復聞虚言也、

『明月記』元久元年（一二〇四）十二月七日

着目したいのは、この当時、基行の母冷泉局が健在であったということだ。ただ基行の出家については、十二月七日条に定家が「復聞虚言也」と書いているように事実ではなかった。

夕自冷泉来、乍車相逢、基行出家僻事、只怨母隱居、

『明月記』元久元年十二月十六日

基行は出家をしたわけではなく、「只怨母隱居」ということだった。その後、基行は藤原頼実女麗子の家司に補されているし、^{注10}のちには従三位に叙され、承久三年（一二二一）に四十二歳で没す。基行が従三位に叙されたことに對し、定家はつぎのように評している。

夕還御之後有除目沙汰云々、深更範光卿招親定咲懸、任内藏頭歟、

基行叙三位、^{年廿八}出仕僅十年許、當時局之賂第一老女也、依一子有此恩歟、

『明月記』建永元年（一二〇六）六月十六日

『明月記』では三位に叙されたことになっているが、『公卿補任』によれば従三位である。他の邦綱息と比べても、従三位は飛びぬけているものだ。基行がわずか十年の出仕で従三位にいたったというが、当時基行は二十八歳とあり、そこから計算すると生年は治承三年（一一七九）である。『公卿補任』の記述

から計算すると生年は治承四年（一一八〇）になるが、いずれにせよ邦綱の最晩年の子と分かる。基行が幼い内に邦綱が没しているという事情もあってであろうか、基行にかんしては、他の邦綱子息らのように近衛家との親しい関係性は見えてこない。大納言典侍との関係を考えてみても、二人は異母姉弟であり、寿永二年（一一八三）、基行四歳の時には平氏一門とともに大納言典侍は西国へ向かっている。大納言典侍が西国から京へ戻ってきたといっても、重邦や成子、綱子のように近衛家や近衛家と密接な環境下にいた邦綱子息らに比べれば接点は少なかったのかもしれない。ひとくくりに邦綱の関係者といっても、邦綱没後、平氏政權崩壊後の身の振り方にはおのおの差があることが分かる。

立場や環境はさまざまであったが、都には邦綱の縁者、すなわち大納言典侍にとつても関係深い人々がいた。建礼門院乳母であった綱子は、^{注11}後白河法皇や宣陽門院に女房として仕えていたと思われ、また、近衛基通息実信の乳母となった大夫三位は、日野殿に居住していたとはいえ、当然ながら近衛家と密なやりとりがあつたはずである。また、冷泉局のような一門の榮華と没落を間近で見ており、多方面に人脈のあつた女性が、平氏一門亡き後もしばらくは存命であつたことの意味は大きいと思われる。こうした人々は大納言典侍の行方を知っていたはずであり、交流がなかったとも考えにくい。つまり、重衡処刑後の大納言典侍の人生をよく知っている人々は少なくなつたと思われるのだ。

重衡ヲバ頼政入道ガ子ニテ頼兼ト云者ヲソノ使ニサタシノボセテ、東大寺ヘグシテユキテ切テケリ。天津ヨリ醍醐トヲリ、ヒツ川ヘイデ、宇治橋ワタルテ奈良ヘユキケルニ、重衡ハ、邦綱ガヲトムスメニ大納言スケトテ、高倉院ニ候シガ安徳天皇ノ御メノトナリシニムコトリタルガ、アネノ大夫三位ガ日野ト醍醐トノアハイニ家ツクリテ有リシニアイグシテ居タリケル、コノモトノ妻ノモトニ便路ヲヨロコビテヨリテ、只今死ナンズル身ニテ、ナクく小袖キカヘナドシテスギケルヲバ、頼兼モユルシテキサセケリ。大方積悪ノサカリハコレヲニクメドモ、又カ、ル時ニノゾミテハキク人カナシミノ涙ニヲボ（ホ）ユル事ナリ。

【愚管抄】

『愚管抄』では、このように『平家物語』の「重衡被斬」の原型ともいえるような重衡と大納言典侍の再会が伝えられている。こうした話が当時の人々に広まっていた一方で、大納言典侍が実信の乳母となり、「広博厳浄之當作云、堂舎人宅殆無比類」（『簡要類聚鈔』）という日野殿に住んでいたことなども周知のことであったという当時の状況を考える必要があるだろう。

四、摩殿御所のゆくえ

ここからは、『簡要類聚鈔』第一にみえる一乗院領「摩殿御所」の詳細や、邦綱の私的な諸活動と近衛家の繋がりを見てゆく。『簡要類聚鈔』は、興福寺一乗院の院主実信からの聞き

書きなどを実信の側近行賢がまとめ記したものである。全五巻であつたようであり、第一巻（弘安五年（一二八二）成立^{注13}）は歴代の一乗院の院主や一乗院領に関する内容となっている。実信は近衛基通息で、大夫三位と大納言典侍はともに実信の乳母となっていた。前稿では、大夫三位や大納言典侍の住まいでもあつた日野殿を中心として、姉妹と実信や基通ら近衛家との関係と考えたが、姉妹と近衛家に関連するのは日野殿ばかりではない。

摩殿御所は、『簡要類聚鈔』に「御門跡外御知行所」の一としてあげられている。

□摩殿^所

本主ハ山僧信覚律師也、大納言典侍□承之故僧正□被進了、元ハ□門大宮面也、堀川□□□面へあ□□^所の際御□^所の東面までハ普賢寺殿御領、当時大北政所御所ノ敷ハ奈良殿御領也、而普賢寺殿之御計奈良殿□進止之地御所の間、普賢寺殿御領相交之条無其便として奈良殿御領北少路面ニある時河の際の御領ヲ令受□御□下家司尚能と奈良殿御吏宣賢能成等相会て致沙汰了

（『簡要類聚鈔』第一巻）

小稿で引用する『簡要類聚鈔』は『一乗院文書（抄）』（京都大学文学部国史研究室、一九八一年）によるが、『大日本史料』（第五編之九・天福五月二十九日項）に引かれる『近衛家文書』十二「普賢寺殿御所領事」に、『簡要類聚鈔』からの引用がみえる。「簡要類聚抄第一^一一乗院実信所従三^三」として、前稿でもふれた

^一 一乗院実信所従三
^三 綱行實法眼記云々

大夫三位から実信へ譲られた「島津」「揖斐」「益田」「仲村」「西院」の五所領と、摩殿御所の条が引かれている。それぞれの本文を比較すると、多少の異同がみえるので、必要に応じてふれたい。

右の『簡要類聚鈔』のとおり、摩殿御所は大納言典侍から実信へ伝領されたものである。日野殿は大夫三位から大納言典侍へ、大納言典侍から実信へ、という伝領の流れだったが、摩殿御所の伝領には大夫三位が関与していない。摩殿御所の本主として信覚律師の名が挙げられているが、信覚と大納言典侍の關係は不明である。

摩殿御所は、「元ハ□門大宮面也」という。近衛家文書に引かれる『簡要類聚鈔』では、「元ハ^{摩殿}倂門大宮西也」とあるが、少なくとも摩殿御所が大宮に面しており、また、「元ハ」とある以上、何らかの変化があつたらしいことは分かる。

摩殿御所が大納言典侍から実信に渡った時期は、承久の乱の勃発以前である。^{注14}しかし、実信に渡ったあと、摩殿御所はどのように扱われていたのかほとんど知りえない。『簡要類聚鈔』第一の日野殿の説明に、わずかに摩殿御所にかんする記述がみえる。

三品の墓所ハ仏身寺也、此寺ハ三品局被建立之、典侍墓所又有日野殿、彼此母子之契也、抑典侍他界之後、承久兵乱之時、物取乱入放火之間、仏身寺之外正覺院御堂以下悉焼失了、當時寢殿ハ京都御宿所料鷹司高倉之辺大納言典侍被沙汰進之御所在之、件御所ヲ被懷渡者也、対屋同御中屋并辺納所ハ故重貞法師日野宿所ヲ令進候間被懷立之、御堂ハ

摩殿御所の御堂被渡之、又とう／＼殿の御懺法堂并御念誦堂たまはらせ給て被立之、

日野殿には大夫三位や大納言典侍の墓があつたという話なのだが、承久の乱に際して物取りが火を放ち、日野殿はその大半が焼失してしまった。そして日野殿修復にあたつては、鷹司高倉のあたりにあつた大納言典侍の御所や、摩殿御所の御堂などを移したというのである。右の日野殿焼失やその修復、移築などは『簡要類聚鈔』が独自に伝える内容で、他の史料には見えない。

その後、摩殿御所が邸宅として貴族の日記などに見えるようになるのは、「大北政所」と称された近衛兼経の妻仁子が摩殿御所に住んだためだ。

午剋許著束帶参摩殿、^{大北政所}今日御逆修三七日也、

〔勘仲記〕弘安三年（一二八〇）五月一日

『簡要類聚鈔』第一の成立は弘安五年と述べたが、ちょうど大北政所仁子が摩殿御所を邸宅としていた時期である。つぎの『勘仲記』の記事から、仁子の住んだ摩殿御所の位置を知ることができる。

次仰路次、出御東陣、高倉小路^北、二條大路^西、洞院東大路^北、待賢門大路^西、油小路^北、一條大路^西、川堂面大門大路^北、迄御所、

（弘安十年（一二八七）七月五日）

御参新陽明門院、春日西行、朱雀北行、中御門西行、高倉北行、鷹司西行、東洞院北行、一條西行、堀川末北行、於

中門被申御慶、

(正応二年(一二八九)四月二十一日)

一条大路を西に行き、「川堂面大門大路」または「堀川」を北に行くと靡殿御所^{注15}という。これらの記事を踏まえつつ、『簡要類聚鈔』の内容についても考えてみると、大北政所(仁子)の御所、すなわち靡殿御所は、「奈良殿」なる人物の御領と関係があったようだ。基通のはからいによつて、基通領と奈良殿領を「受□御□」させたといったことがあったらしいが、背景事情が明確でないので、詳細については改めて調査したい。ただ、その沙汰にあたつたという下家司尚能は、『民経記』安貞元年(一二二七)十月十日、十二日条などにみえる近衛家の下家司「右衛門少志尚能」のことであろう。さらに、『玉葉』嘉禎三年(一二三七)四月十六日条に「右少志惟宗尚能」、『経俊卿記』暦仁元年(一二三八)四月二十日条の除目に従五位下「惟宗尚能^{檢非違使}」とあることから、尚能は惟宗氏と判明する。惟宗氏は摂関家の下家司を世襲してきた一族であり、尚能もまた近衛家の下家司として仕え、靡殿御所にかんする問題にも動いていたようである。

靡殿御所は、龟山上皇の御所や、兼経の孫新陽明門院位子の居所になることもあった。基本的には近衛家のひとびとが用いた邸宅であり、当然靡殿御所の由緒は周知であつたろう。大納言典侍の存在は想像以上に都から消えていないことが十分に察せられる。靡殿御所は今でこそあまり知られぬ一邸宅となつてしまつたが、実信から一乗院に関係するさまざまな歴史を伝え

聞いていた行賢のように、靡殿御所の由緒や、実信と大納言典侍や大夫三位の関係を知っている者は少なくなかつたはずだ。

さらに後世の靡殿御所に関係する史料にもふれておくと、楞伽寺の敷地をめぐる文書に「靡殿御所」^{注16}がみえる。楞伽寺は、康永三年(一三四四)に近衛基嗣が虎関節鍊を開山として一条以北の地(五辻の北、坊城の東)に建立した寺である。文書の内容は、貞和二年(一三四六)、「五辻坊城北頼敷地」や「楞伽寺前敷地」を相伝していた者たちがそこを楞伽寺の地とするために去り渡したというもので、その相伝していた地を「靡殿御所北畠地」や「近衛殿御領靡殿御所北浦敷地」と替えたという。十四世紀なかばまでは、靡殿御所が存在しており、「近衛殿御領」という位置づけであつたことが分かる。

五. 邦網の遺品にまつわる言説

さて、『簡要類聚鈔』第一にみえる邦網が遺した品々についても見ておきたい。おおまかな内容については大山喬平氏^{注17}によつてすでに言及されているので、ここでは特に邦網の遺品をめぐる人間関係や、その意味するところを考えてみたい。

一 五条大納言本尊信像毘沙門天王ヲハシマス、彼祈師^ニ命^テ長日毘沙門行法被修之、大納言典侍之時園城寺三位僧正重円修之、^②其供料嶋津郷満家院知行之、彼僧正他界之後故御所御時件弟子円順僧正修之、円順僧正之後円顕僧正承之原殿御時件御本尊被召返之、被止其行^{止行}
一 五条大納言有驗僧^某仁命^{仁命}秘法^{秘法}被修之^{止行}処、小龍一^{五寸許}

壇上出現、取之箱^二令納^テ干堅^ム、其形首より手足まで無風勢之龍也、頗奇妙之物也、于今後相伝之、故御所御時ハ七月七日など密々令取出□□風はませられる

一大内裏^繪、五条大納言為未來之龜鏡被図置之、都無余本、自日野殿御相伝了、殊可有御秘□普賢寺殿有仰、然間法皇御時故御所雖令預御尋給、不被進也

『簡要類聚鈔』第一

ここからは、邦綱の私的な信仰やそれに関連する人間関係を見て取ることができる。

まず、五条大納言邦綱の本尊という毘沙門像について見よう。邦綱には本尊とする毘沙門天王像があった。邦綱存命のうちは邦綱の「祈師」が毘沙門の行法を修していたのだという。邦綱が亡くなり、大納言典侍の時には園城寺僧重円が修し、島津満家院がその料にあてられた。重円亡き後、実信の時には重円の弟子円順、そして円順が継いでいた。しかし原殿の時に本尊は一乗院に召し返されたという。

邦綱の「祈ノ師」は不明だが、園城寺三位僧正重円、弟子円順僧正、円順僧正についてまとめておこう。園城寺三位僧正重円は、源重忠息で小一條院の末裔にあたる。天福元年（一二三三）には園城寺別当となり、また延応元年（一二三九）十二月に長吏に任ぜられるも、翌年五月には辞している。建長元年（一二四九）、重円は八十八歳で入滅するが、その後は弟子の円順が引き継ぐ。円順は重円の兄弟である源宗仲の子で、宝治二年（一二四八）には園城寺の別当となった人物である。そして、

円順のあとには円順という僧が出てくるが、この円順は源定通息で、円順の弟子であった。円順も弘長七年（一二六七）に園城寺別当となっており、永仁四年（一二九六）七十五歳で没した。重円や円順らは、近衛家の私的な行事にも関与しているのがたびたび確認できる。^{注19}

さて、重円ら園城寺の僧に邦綱の本尊と毘沙門の行法は継がれてきたということが分かったが、原殿の時分になって邦綱の本尊は一乗院に召返されたという。原殿とは、実信の後に一乗院の院主となった近衛兼経息信昭を指す。^{注20} 信昭は建長六年（一一五三）に十歳で出家しており、邦綱の本尊が一乗院に召返されたのは建長六年以降ということになる。治承五年に邦綱が亡くなり、すでに半世紀以上が立っているが、邦綱の本尊であるという由緒があったからこそ、一乗院に召返されることとなったのだらう。この時期においても、近衛家と邦綱の結びつきは重要なものであり、絶えず確認されるべき縁であったのだ。

次は、一乗院に相伝された小さな龍の話である。邦綱が有驗の僧に命じて秘法を修させたところ、五寸ばかりの小さな龍が出現したのだという。その龍をとり、箱に納めていたというのが、実信の時には七月七日などにひそかに取り出だすことがあったらしい。『簡要類聚鈔』の記述は簡略で、さほど長い説明ではない。しかし、その内容はまるで何かの説話集から取りだしたかのようなものである。というより、邦綱や実信周辺ではまことしやかに語り伝えられていた龍出現譚であったのだらう。一乗院周辺には、邦綱にかんして所領の相伝関連ばかりではなく、

こうした仏教色の濃厚な言説も存在していたのだ。

最後に、大内裏の絵について。邦綱が「未来之亀鏡」に備えるべく作らせたものという。都に余本はなく、ただ大夫三位より実信に相伝されていたものしかなかったが、その絵は「法皇」（大山氏は後鳥羽とする）さえ求めるものだった。しかし実信は基通の仰せに従い、秘蔵のものとして守ってきたらしい。法皇は、邦綱の大内裏絵が大夫三位に伝わり、そしてさらに実信に渡ったことを知っていたということになる。前稿でも述べたことだが、大夫三位や大納言典侍が存命であった頃、彼女らと近衛家が非常に密接な関係ということがいかに周知の事実であったかがうかがいしれるのである。

六、おわりに

ここまで、大納言典侍をよく知る人々のその後、そして所領を含めさまざまなものが邦綱から一乗院へと渡っており、それらは決して軽んじられずに丁寧に扱われていた様子を確認してきた。

実際の大納言典侍は、どのような環境でその生涯を終えたのか。中世の人々にとって、大納言典侍とは何者だったのか。どのような集団のいかなる認識のもと『平家物語』の「重衡被斬」は成立したのか。こうした問いには、容易に切り離すことはできないさまざまな問題が絡み合っている。

『平家物語』の大納言典侍は悲劇的な女性というイメージに覆われていようが、それはあくまで『平家物語』の造形にすぎ

ない部分がある。たいへん立派であった日野殿に住み、近衛家との親密な関係の中で日々を過ごした大納言典侍の余生は、決して『平家物語』からはうかがわれない。大納言典侍の足跡やその生涯を知っている者は少なくなかったはずだが、『平家物語』での大納言典侍はあたかも、亡き夫重衡を弔い、出家をした建礼門院に仕え、静かに生涯を終えた女性であるかのような語りぶりとなっている。実際の大納言典侍の生涯、ないしは大納言典侍にかんするひとびとの記憶と並行して、重衡と大納言典侍の再会譚が流布し、『平家物語』の大納言典侍像も形成されていったはずなのだ。こうした大納言典侍を中心にすえた問題とあわせて、「重衡被斬」には重衡に着目した場合の問題もある。前稿でもふれたが、「重衡被斬」を含め『平家物語』の重衡には、何かと八条院が関連する。「重衡被斬」においても、八条院に仕えている者が重衡の行く末を見届ける重要な役割を担う。

実際の当時の様子と、『平家物語』の語っているもの、または語られていないもの、それらの意味するところを考えてゆくことによって、「重衡被斬」や大納言典侍像がどのようにに成立していったのかを浮かび上がらせることができるだろう。

注

1 『玉葉』文治元年（一一八五）六月二十三日条。

2 拙稿「『平家物語』「重衡被斬」の成立背景」（『国語国文』第八十二巻第五号、二〇一三年五月）。主要な参考文献

はこちらを参照されたい。

- 3 『源平盛衰記』（巻三十九「友時重衡の許に参る附重衡内裏の女房を迎ふる事」）では、内裏女房が成範女中納言局とされ、重衡とのあいだに一人の男子がいたという。
- 4 『新訂吉記 索引・解題編』（和泉書院、二〇〇八年）を参考とした。
- 5 角田文衛「嵐の後」（『平家後抄』上、講談社、二〇〇〇年※初出、朝日新聞社、一九八一年）。
- 6 『公卿補任』元久三年（一二二六）。
- 7 『愚昧記』治承元年（一一七七）十一月十五日条、『玉葉』寿永二年（一一八三）八月二日条。曾我良成「或人云・「人伝云」・「風聞」の世界―九条兼実の情報ネット―」（『年報中世史研究』第二十一号、一九九六年五月）、高橋昌明「平家都落ちの諸相」（『文化史学』第六十五号、二〇〇九年十一月）、樋口健太郎「平安末期摂関家の「家」と平氏―白川殿盛子による「家」の伝領をめぐって」（『中世摂関家の家と権力』、校倉書房、二〇一一年※初出、二〇〇四年）参照。
- 8 『猪隈関白記』建久九年（一一九八）一月九日条、正治元年（一一九九）九月十六日条、前稿参照。
- 9 前掲（注7）曾我論文参照。
- 10 『明月記』元久二年三月一日条。
- 11 槇道雄「荘園群編成とその経営実態―荘園領主経済の実態分析―」（『院近臣の研究』、続群書類従完成会、二〇〇一年）。
- 12 『尋尊大僧正記』文明十一年（一二七四）五月十三日条に「^{ナヒレト}靡殿」とある。靡殿御所に言及している先行研究に、高群逸枝「平安鎌倉室町家族の研究」（『国書刊行会、一九八五年）、渡辺悦子「御霊殿―室町・戦国期近衛家の邸宅と女性たち」（『同志社大学歴史資料館報』第九号、二〇〇五年七月）がある。
- 13 『簡要類聚鈔』（「一乗院文書（抄）」京都大学文学部国史研究室、一九八一年）あとがき、大山喬平「近衛家と南都一乗院―「簡要類聚鈔」考―」（『日本政治社会史研究』下、塙書房、一九八五年）参照。
- 14 『簡要類聚鈔』によれば、大納言典侍は承久の乱勃発以前に没している。
- 15 靡殿御所の位置については、前掲（注12）高群、渡辺論文も言及されている。
- 16 楞伽寺の位置や敷地をめぐる問題等については、高橋康夫「北辺の地域変容―十二世紀以降―」（『京都市中世都市史研究』、思文閣出版、一九八三年）を参考とした。また、海蔵院文書は『大日本史料』南朝興国五年・北朝康永三年（一三四四）二月二十六日条を参照した。
- 17 前掲（注13）大山論文参照。
- 18 重円、円順、円顕については、『尊卑分脈』、『三井統燈記』、『寺門伝記補録』による。
- 19 たとえば、新たな堀河邸で安護護摩を行ったのは重円で

あったし（『岡屋関白記』寛元四年（一二四六）二月十三日）、近衛兼経が「先公」（近衛家実）の衣に火が燃え移り、家実が「哭泣」という夢を見て「類罪業之由歟」と重円に阿弥陀経を読ませるなどしている（『岡屋関白記』寛元四年閏四月二十三日）。また、西林寺における基通忌日や家実忌日の仏事にも重円、円順らの名がみえる（『岡屋関白記』寛元四年五月二十九日、宝治二年（一二四八）十二月二十七日）。近衛家と園城寺という観点からいうと、基通息の円忠、円静、静忠をはじめ、家実息増忠（みな長吏となっている）など、園城寺に入った者が少なくない。

国立公文書館所蔵『文保三年記』（石附敏幸「国立公文書館所蔵『文保三年記』（千葉大学人文研究）第四十号、二〇一一年三月）文保三年（一二一九）十二月二十二日条では、文永十年（一二七三）四月十六日に興福寺寺務となった人物を「原殿」とする。該当するのは信昭（興福寺寺務次第）である。『慕帰絵』（真宗重宝聚英第十卷）には「やかて、件法印引導にて摂津国原殿の禪房へはまいりけり。其時の門主は前大僧正坊信昭 岡屋 摂政殿 御息とぞ申しける」とある。

使用テキスト

延慶本『平家物語』（延慶本平家物語 本文編）勉誠社）、
覚一本『平家物語』（日本古典文学大系）、『玉葉』（図書

付記

寮叢刊『九条家本玉葉』、『明月記』（国書刊行会）、『猪隈関白記』・『岡屋関白記』（大日本古記録）、『勘仲記』・『山槐記』（増補史料大成）、『玉葉』（思文閣出版）、『親経卿記』（高科書店）。

本稿は、科学研究費補助金（23・10510）による成果の一部です。

（しおやま・たかな

博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）